早川町応援団獲得マガジン

やまだらけ

YAMADARAKE

OCTOBER
No. 7
2004

移住者の早川ライフ

「田舎暮らし」という言葉をよく耳にするようになった。昔はネガティブなイメージだったこの言葉も、最近では個性的で豊かな暮らしの象徴として憧れさえ抱かれているようだ。早川町でもここ数年、都会からの移住者が増えている。過疎化を解消するほどではないが、新しい動きが起きていることは確かである。

一口に移住者といっても、人それぞれ。自分の創作の場を求める人、自然を相手にする仕事を求める人、老後の生活の場を求める人などさまざまなケースがある中で、今回は定年退職を待ちきれずに早川町に移住した浦邊義明さん、三枝子さん夫妻に密着取材した。

共通の趣味である歌を通して知り合ったお二人は、神奈川県川崎市でマンション暮らしをしていたが、三年前に早川町を訪れて以来この町の虜になり、去年ついに移住。子育ても終わり、老後の人生を楽しむために早川町で暮らすことを決めたのだ。そこにはゆったりとした時間が流れ、贅沢な自然とともに自分らしく無理なく暮らす二人の姿があった。

このいろりは引越の際に友人からプレゼントされたもの。おかぎさんは義明さんの手作り。外を眺めながらお茶を飲む。至福のひととき。

気軽に遊びに来てください！

浦邉さんの作品は「南アルプスプラザ」ほか町内数カ所の施設にて、展示販売されています。

■改修した民家が生活の舞台

早川町への移住を決めてから、一番の懸案だったのが家探しである。知人を通じて、住めそうな空き家をいくつか紹介してもらったそうだ。「他にも空き家を見たんですけど、家の配置、日当たりなどを考え、何よりこの家の家主がとてもいい方だったので、ここに決めました。ちょっと広いかなあとも思ったけど」。家主は盆や葬式のときには戻っていたので、最初は貸すことをためらったそうだが、「そういうときはこの家に泊まってください」と言って、何とか貸してもらったという。

二〇〇三年の春から移住開始。当初、家主は荷物を片づけ、浦邉さんは荷物を運び込む。お互い少しずつ荷物を運ぶ、ところてんのような引き渡しだ。「完全に引っ越すまで三〇回、三ヶ月かかりました」。また古い家の大半は借りても、そのまま住めるわけではない。トイレ、風呂、畳などを直して改修費は三〇〇万円超。その他、自分で直せるところは浦邉さん自身が直した。「引越の三ヶ月間は、毎回来る途中で材料を買って少しずつ直したんです。楽しかったですよ。逆に直すところがなくなるとつまらない。いたずら好きなんでね（笑）。だからこの家に『板面庵（いたづらあん）』って名前も付けたんです」。

引き渡しの際、家主からは「残ったもの（家具など）は、好きなようにしてくれ」と言われた。これには二人も大喜び。家主の父が作ったという棚や机は、そのまま使わせてもらっている。眠っていた農具や道具も、義明さんにとってはたまらない宝物。ナタ、カマなどは研ぎ直して使っているという。

■ご近所さんとももちつもたれつ

家主だけでなく、ご近所さんとの付き合いも重要である。「最初は集落の方々に挨拶に回りました。自分たちから入っていかないと居心地よく住めないから」。集落の集まりにも、可能な限り出ることにしている。近所の人もみな親切で、とてもよくしてくれる。畑仕事を教わったり、できた野菜を頂いたり。時には段ボール3箱ものじゃがいもが留守中に玄関に置いてあることも。「食べきれないよ」と苦笑い。

逆に義明さんの道具好きが近所の噂になり、「カマ研いでくれ」、「クワはずれちゃったから直してくれ」と頼みに来る人もいるという。家主の父もものづくりが好きだったようで、「爺さんが帰ってきたようだ」と言われたことも。こうして取材している最中にも、近所のおばさんが錆びたカマを片手にやってきた。

■日々、是、趣味三昧

家と近所付き合いの環境さえ整えば、あとは本当にのんびり暮らすだけ。普段の生活はお互いの趣味に没頭し、本当に好きなことをやっている。義明さんは木彫、三枝子さんはステンドグラス。家の中は二人の作品で溢れていて、まるで美術館にでも来たようだ。しかもその作品は、どれも趣味のレベルを超えている。「東京に持っていけば売れるのに」とよく友人に言われるが、義明さん曰く「たまにはイベントに出展して売りますよ。でも小遣い稼ぎ程度。ここでの生活は家賃も物価も安いし、ほとんどお金を使わないから、金儲けする必要がないんですよ。都会にいたら、定年後も新たに職を探さなくては生活できなかったでしょうね」。

■自然の力が変えたもの

さらに、以前は、ほとんど野菜を食べなかった義明さん。それが、こちらに来て自分でキャベツ、ピーマン、じゃがいも、かぼちゃ、キュウリといった野菜を作るようになってからは、食べるようになったという。「こっちの野菜は味が濃くて美味しいから食べられるんです」。

また、健康面でも変化が現れた。義明さんは早川町に来てから喘息が治ったそうだ。「ストレスから解放されたおかげか、胃潰瘍も治りました。こんな生活があったんだ、こんな生活してもいいんだ、としみじみ思いますね」。

三枝子さんの変化は、ステンドグラスの作風として現れている。「昔は鳥や蝶なんてモチーフにしなかった。想像力は自然の中でしか培えないと実感しましたね」。何気なく拾っていた蔓を額縁に見立てて、その中にステンドグラスをはめ込んでみようと思いついたのも早川町に来てからだ。自然に影響を受けて、面白いようにアイデアが出てくる。近頃は義明さんが蔓で枠を作り、それに三枝子さんのステンドグラスをはめ込む、夫婦の合作がたくさん生まれている。

■家族や友人も羨むふたりの早川ライフ

「相模原にいる合唱の教え子に今の生活の話をすると、みんな羨ましがるんですよ。遊びに来たらと誘うと、喜んで来ますよ。」息子もテニス仲間を連れて早川に遊びに来るそうだ。「一泊二日で一人七～八千円なら、東京で一晩飲み歩くのと変わらない。それなら早川に来て、テニスしてお酒飲んで、またテニスして…という方が断然いい。」そんな息子は、早川の美味しい水が気に入って、来るたびに五リットルもの水を汲んで帰るという。

老後の生活を満喫しているお二人の笑顔は絶えず、それが都会の人にも伝わりつつあるようだ。（遊佐敏彦）

都会の喧噪から解放され自分らしい生き方を実現

早川に　出会って3年　来て1年

いたづら大好き 浦邉さんご夫妻

夫　義明さん（61歳）

相模原市役所に勤務していた義明さんは、移住するために定年まであと一年のところで退職。木彫、水墨画、版画など、昔からいたづらが大好き。早川に来てからは、流木など、地元の素材を使った作品を多数作っている。

妻　三枝子さん（54歳）

相模原市で合唱団の講師を長く務めるも、移住を期に辞めようと決意。しかし、教え子の引き留めによって、今でも月2回相模原へ通っている。ステンドグラスは、神奈川にいるときからの趣味。しばらく休んでいたが、早川に来て再開。

田舎暮らしの風景

玄関灯は、ステンドグラスに流木で作った枠をつけたもの。これも2人が早川の自然に触発されてできた作品。「板面庵」と名付けられた浦邉邸では、玄関先からそのいたづらに圧倒される。

庭先にある手作りのバーベキュー台。友人や家族が集まったときには、畑でとれた新鮮な野菜、川魚や獣肉などを焼いて盛り上がる。

お昼に、冷やし中華風のそうめんを頂いた。漬け物には白瓜が。野菜はみな裏の畑でとれたもの。これらが義明さんの食生活を変えた。自分で作ったものだから安心して食べられる。しかも美味しい。「何なら夕食もご馳走しますよ。いつでもお腹を空かせていらっしゃい。」

左のステンドグラスが二人の合作。アケビ蔓の枠をつけると、自然の中に置いても似合うようになる。右のフクロウは義明さんの手彫り。庭に立ち枯れていた栗の木を使って作った。

義明さんの年賀状は、毎年手彫りの版画。それを楽しみにしてくれている人も多く、喪中の人がどうしても欲しくて、裏の絵だけ印刷して送ってくれと頼んできたり、送られてきた年賀状を勝手にコンクールに出して入賞したり、という笑い話も。「今後は、早川の橋、滝、川などを題材に、水墨画や版画を作りたい。」

取材にご協力いただいた浦邉さん夫妻に、移住までの経過や移住希望者へのアドバイスを伺いました。

早川町で暮らそう！

○早川町との出会いを教えてください。

三枝子さん（以下、三）：友人から「いいところがある」と勧められていたんですよ。2001年の秋に主人と初めて来たときは、紅葉がすばらしくて、観光地化されていないところに魅せられました。

その後、旅行嫌いだったはずの主人が「今度いつ行く？」と言うんですよ。結局その後年内に３回も来ました。当時はマンション暮らしで、定年後は土いじりやものづくりができる家に住みたいと思っていたので、来るたびに「こんなところに住めたらいいな」という思いが強くなってきたんです。

○実際に住むまでにどんな経緯があったのですか？

三：早川町に来るたびに町内の知り合いも増え、みんな本当に親切にしてくれました。先に移住してきた方とも仲良くなって、いろいろなアドバイスをもらい本当に助かりました。

2002年には１年間四季を通して、集落の日当たりを調べたり空き家を探したりしながら、町内を巡ったんです。ほとんど全ての集落に行ったと思います。体が弱くなってからの生活を考え、住むならあまり山奥すぎず、適度に平らで日当たりのよい集落に住みたいと思ってここに決めました。

義明さん（以下、義）：仕事のストレスなどから体調を崩し、定年まであと１年半くらい残っていたんですけど、早川に住みたくなって、仕事を辞めようかなと思い始めました。

三：それで私が「体を悪くしてからじゃ遅いから、辞めちゃえば」と後押したんですよ。仕事辞めちゃえと勧める妻も珍しいわよね（笑）。

○こちらの生活で大変と感じることはありますか？

義：特に大変と感じることはないですね。ただ、人が減って高齢化していくことで、集落の共同作業に支障が出てきていることは気になりますが。なにしろ老後の生活を求めてきたのに「なんだ、わけーし（若い人）じゃねえか」と言われたときは驚きましたよ（笑）。

○これから移住を希望する人にアドバイスがあれば教えてください。

義：何事も自分でやっていく気概がないと、田舎暮らしはできない。ただ「いいな」だけで移住すると失敗するでしょう。

三：私たちは１年という時間をかけて、早川町とはどんなところかを、実際に住んたことを想像しながら調べました。そして本当に住んでも大丈夫だと思ったから移住を決意したのです。その間にこちらでの知り合いも自ずと増えたので、住み始めたときは、既に友人が結構いました。友人のサポートに救われたこともあります。だから準備期間は必要ですね。

また集落生活は「郷に入れば郷に従え」ですよ。100％納得はできないかもしれないけれど、それでもきちんと付き合いができないと長続きしないでしょう。

11/21

やまだらけツアー第６弾

早川の渓谷と紅葉を描く！

水と紅葉と日の光。大自然が織りなす美しい風景を、絵手紙にしてみましょう。早川渓谷、雨畑の見神の滝、七面山登山口の白糸の滝などを巡ります。昼食はヴィラ雨畑にて豆腐料理に舌鼓を打つ予定です。

日時／11月21日（日）午前９時～午後３時頃
集合場所／角瀬トンネル出口右の広場（ここでバスに乗り換えます。）
参加費／会員2,000円、非会員2,500円（昼食代、葉書代込み）
定員／20名（要申込、先着順、締切11月５日）
備考／はじめての方も大歓迎です！画材（顔彩、筆など）は各自持参を基本としますが、用意できない方にはこちらでお貸しします。葉書はお一人につき10枚を用意します。河原を歩ける靴（運動靴等）でお越し下さい。

申し込み先：やまだらけ編集部
☎ 0556-45-2160（11月５日締切）

早川の旬直送便

早川きのこ園の「きのこの詰め合わせ」

1箱 1kg 3,000円（送料・税込み）

内容・なめこ（くるみ原木）400ｇ
・くりたけ（なら原木）300ｇ
・しいたけ（一部菌床）300ｇ

商品と一緒に振込先の銀行口座をお知らせします。

申し込み先：早川きのこ園
☎ 090- 7235-6461（10月20日締切）

町内できのこ園を営む早川正治さんが、丹誠込めて育てたきのこ３種類を詰め合わせてお届けします。なめこはみそ汁、くりたけは焼いて田楽味噌をつけて、しいたけはバターで炒めて醤油をたらすと最高です。もちろん、全て合わせてきのこ汁にするのもお薦め！

注文受付は**10月20日**までとなっております。ご注文はお早めに！

手に持っているのは、山で採ってきた天然のマイタケ（右手）と釈迦シメジ（左手）。
今年は豊作だ！

■NEXT やまだらけ

次号特集（11月下旬お届け）

「南アルプス邑温泉郷徹底分析！」

早川町の自慢といえば、真っ先にあがるのが温泉。昔から湯治場として栄えた西山温泉、近頃秘湯として注目を浴びている奈良田温泉など、町内には10箇所もの日帰り温泉や温泉旅館が存在します。湯治の季節を目前にした次号では、これらの温泉を徹底的に分析し紹介します。

どれも効く温泉ばかりですよ～。ぜひ早川町の温泉に入って、日頃の疲れを癒してください。

■読者の声

●いつも楽しく読ませていただいております。次号の移住者の話を早く読みたいなと待ち遠しいです。私も早川町のような所に引っ越したいと思っているので。（匿名希望さん）

■今回の特集、ご期待に添えましたでしょうか。「早川町のような所」といわず、ぜひ早川町へお越し下さい（笑）。

●いつか金山について特集してもらいたい。手軽にできる砂金採集は最大のアウトドアです。支流にはたくさん砂金があります。まちおこしの一端としていかがですか？（神奈川県、Hさん）

●早川町の観光として昔の雨畑金山、早川金山のどこか形跡の見学をして金石でも持ち帰れたら夢がありますね。（Mさん）

■偶然にもお二人の方から金山にまつわるアイデアを頂きました。実は、やまだらけツアーで砂金採りを実施できないか検討中です。もう少し時間はかかりそうですが、実施にこぎ着けた際はぜひご参加下さい！

得情報

10月10，11日、JR山手線大崎駅隣接の大崎ニューシティーで開催されるイベント「しながわ夢さんぱし2004」に、早川町が特産を携え出店します！もちろん我々編集部も参加。「やまだらけを見た」で、恒例の石臼挽きコーヒーを１杯サービスします！

今回は早川町に移住した方の特集でしたが、かくいう私も実は移住組。しかし、仕事に追われ、浦邉夫妻のようなステキな生活とはほど遠い毎日を過ごしています。それでも、地元の方から畑でとれた野菜、自家製の味噌や漬け物を頂くのは日常茶飯事。仕事上でも、多大な協力を頂いています。地元の方々のこうした心遣いが、移住者がより暮らしやすい環境を作ってくれているのです。

山を覗けば宝の山
やまだらけ

発行元／フィールドミュージアム運営委員会
住　所／山梨県南巨摩郡早川町薬袋430　〒409-2727
電　話／0556-45-2160　ファクシミリ／0556-45-2268
ホームページ／http://www.town.hayakawa.yamanashi.jp/fm/